Rapport

ラポール

Asahikawa Kosei Hospital

2019
01

超高齢社会に突入し、その需要は増加の一途を辿る「泌尿器疾患」。

比較的身近な疾患でいうと、「尿管結石」や「排尿障害」などがあるが、数ある病症の中でも、男性特有の疾患である「前立腺がん」は、近年罹患者数が著しく伸びており、男性の部位別がん罹患者数で見ると、「胃がん」「大腸がん」「肺がん」に次ぐ多さ。最新のがん統計予測によると、「前立腺がん」が近い将来、最多となるとも予測されるほどである。

社会の高齢化の進展に伴う影響は男性だけではない。近年は、加齢による「過活動膀胱」などの症状を抱える女性の罹患者も増えているのが現状であり、今後、泌尿器科領域における治療の需要はより一層高まっていくと考えられる。

人口約34万人、道北最大の規模を誇る 旭川市——。

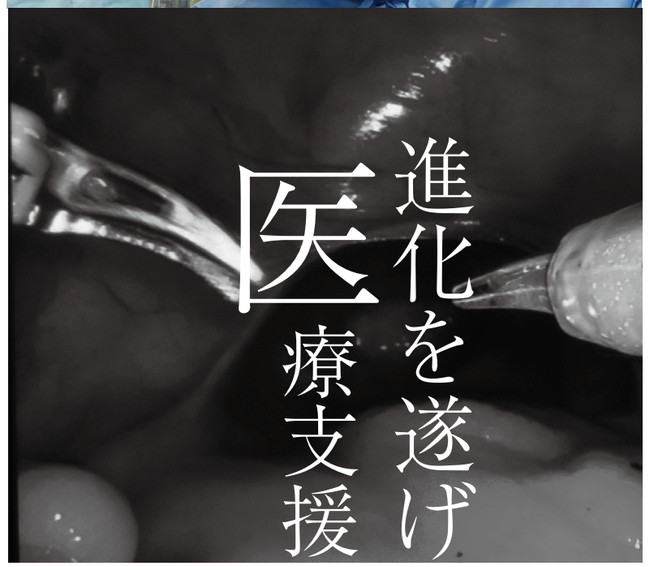
この地で地域に根ざした医療と先端技術で人々の健康を支える旭川厚生病院では、多種多様な泌尿器疾患に対し柔軟に対応できる、患者にとって快適な療養環境を整えている。道内でも有数の実績を誇り、これまで多くの患者の健康に寄与してきた、旭川厚生病院 泌尿器科。

ここには、技術を駆使し、高い志で病気と向き合う医師たち。そして、それを支える環境がある。

urology

「泌尿器 - ひにょうき -」
尿の分泌・排泄に関する臓器の称。
腎臓・尿管・膀胱・尿道から成る。

da vinci【ダヴィンチ】
4本のアームを持った本体と、操作台、助手用モニターで構成され、執刀医が専用の操作台に座り、中の3Dモニターを見ながら指先でアームを遠隔操作し、患部の切除や縫合を行う手術支援ロボット。



医療支援ロボット。進化を遂げる

高度医療の実践

腎臓や膀胱、尿道など尿の分泌や排泄など人体において重要な役割を司る泌尿器。それゆえ手術では、繊細且つ緻密な作業が求められる。また、患者の体への負担を軽減するために、より早く、効率の良い対処が不可欠というのはいうまでもない。よって、医師の個人の技術や能力は勿論のこと、手術に使用する機器の性能が高ければ、より質の高い治療を提供することができる。

そして近年、泌尿器科界では新開発された機器の登場によって、治療方法が革新してきた。その代表の一つが、内視鏡下手術支援ロボット「ダヴィンチ」である。

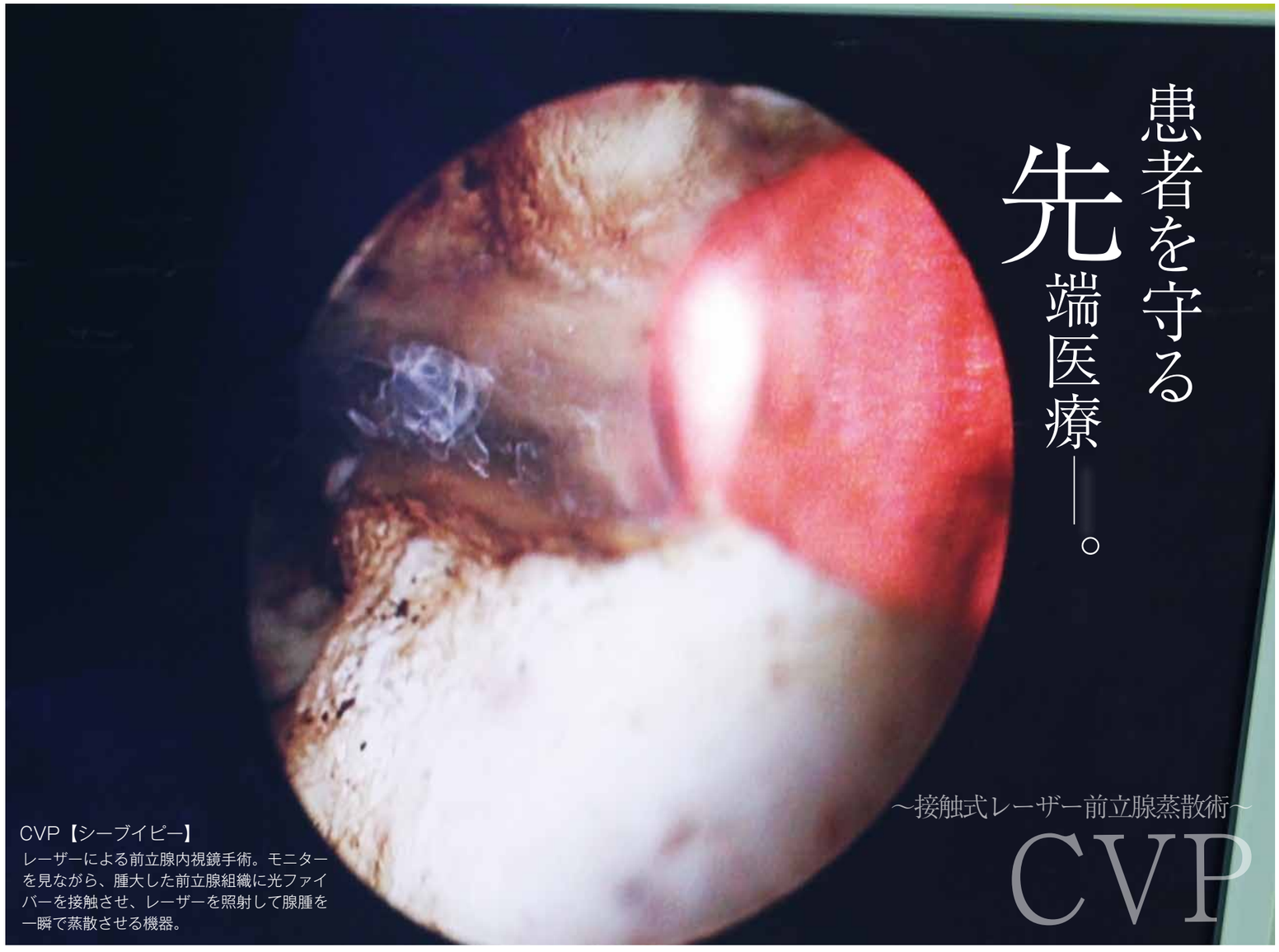
当院では、平成27年12月にダヴィンチxiを新たに導入。執刀者が遠隔操作によって繊細な作業を施すことができる精巧な機器である。そのメリットは、患者自身の負担の少なさにある。従来の開腹手術と比較すると、術中の出血量が少なく傷口が小さいため目立ちにくく、手術後の疼痛を軽減することができる。

© Intuitive Surgical, Inc. All rights reserved.

登場以来、徐々に全国の病院で普及し、今や主流となった医療支援ロボット「ダヴィンチ」。当院で導入した「xi」はその中でも最新機種のダヴィンチであり、従来のものと比べ、機械のパーツがより小型化されただけでなく、操作する4つのアームの自由度や可動域、カメラの性能なども向上した。前立腺がんや膀胱がん、腎がん部分切除など、日々多くの高度な手術で活躍するダヴィンチxi。当院には実に心強いサポーターがいる。

患者を守る先端医療―。

～接触式レーザー前立腺蒸散術～ CVP



CVP【シーブイピー】
レーザーによる前立腺内視鏡手術。モニターを見ながら、腫大した前立腺組織に光ファイバーを接触させ、レーザーを照射して腺腫を一瞬で蒸散させる機器。

最先端技術の結晶

泌尿器疾患の治療を進化させ、主流の医療機器へと成長を遂げた「ダヴィンチ」。だが、当院では最近、前立腺肥大症の手術治療においてより高度なCVPを開始した。

CVPは、ダイオードレーザーを使用した革新的な方法であり、前立腺肥大症に対し、より安全で簡便な治療を可能にしている。術者は尿道から細いケーブルを通し、高精細モニターを見ながら、先端部の光ファイバーを患部の組織に接触させて瞬時に蒸散させるというものである。CVPの特徴であるこのレーザーは、照射する組織の水分と血液中のヘモグロビンに吸収される波長に設定されている特殊なレーザーで、照射した組織を、ドライアイスのように気化させて消すことができる、まさに最先端技術の結晶といっても過言ではない。

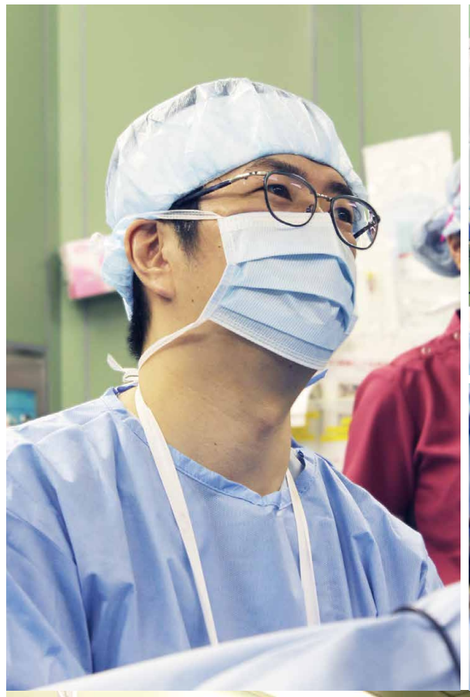
また、CVP手術がもたらすメリットとして、ダヴィンチ同様に、手術中の出血量が極めて少ないという点がある。この止血効果の高さは、手術時だけでなく、治療全体にも良い効果を与えている。

通常、脳卒中や心筋梗塞で抗血栓薬を服用している方は、休薬に伴い、服用しない場合と比べて約2週間ほど長く入院しなければならないが、CVPの場合は、休薬せずに手術を受けることができる。

このように、薬を服用していない方と同じ入院期間で治療ができるということもCVPの魅力の一つ。

また、術後の入院期間もわずか4～5日。痛みが少なく、退院後の頻尿や失禁も極めて少ないという点でも医療関係者から多くの支持を集めている。現在、CVPを導入している病院は全国でも未だ数えられるほどで、北海道内に至ってはごくわずかである。

このように当院では、患者の生活の質を向上させることを第一に考えて治療を行い、より多くの患者のニーズに応えられるよう、希少かつ高度な最新機器も積極的に導入し、より質の高い環境の整備に力を尽くしている。



～腹腔鏡手術～
Laparo

Laparo【ラパロ】
腹腔鏡手術。5㎜～1㎝程度の小さな傷から腹腔内に手術器具を挿入してモニターを見ながら操作を行う。

技術と技術が導くもの―。

前頁で紹介した「ダヴィンチ」「CVP」と同様に、当科で得意としている手術。それが「ラパロ」手術である。

「鉗子（かんし）」と呼ばれる柄の長い器具を、腹部に開けた小さな傷口から挿入し、患部組織の切除や縫合を行う「ラパロ」手術。炭酸ガスを腹腔内に注入して膨らませることで、術者の視野と作業空間を確保し、腹腔鏡カメラとモニターを確認しながら作業する、泌尿器治療を代表する術法の一つである。

モニター映像のわずかな変化と鉗子を通じて伝わる繊細な感覚を頼りに行う高度な治療。それゆえ、術者には十分な専門のトレーニングや高い経験値も求められる。傷口が小さく、出血も少ないため、術後の回復が早いという長所があり、主に腎臓がんの切除や摘出手術など多くの手術に用いられている。

融合する二つの技術

こうして、多種多様な病症に合わせ、常に最適な治療方法を選んで治療することは、患者の体の負担を最小限に抑え、術後の合併症の発症リスクを大幅に減らすことにもなり、最終的に患者の早期社会復帰へと繋がっていくのである。それを大きくサポートするのが今回紹介した「ダヴィンチ」「CVP」「ラパロ」などである。

しかし、こうした機器を使えばなんでも治療できるわけではない。機械がどれだけ優れていようとも、それを操るのは勿論医師自身の手。性能を生かすも殺すも医師に委ねられる。当科がこれまで多くの人たちから高い評価を得てきたのは、治療法に新たな広がりを持たせる先端機器に加え、医師たちが患者一人一人と向き合い、高みを目指し、そしてその腕を磨き続けてきた結果なのである。

共にその先へ——。

高き志

先端医療を積極的に実践し、北海道の泌尿器科界をリードする当科では、多様な選択肢から患者にとってベストな治療法を選んで提供している。

それは、前頁でもお伝えした通り、医療機器の著しい発展によって、その精度と効率が上がったことも理由となっている。今後、より高性能な医療ロボットが開発され、世に広まっていくことだろう。

だが、それがゴールではない。

「肝心なのはその『先』にある」と当科の医師たちは話す。

「最新ロボットがあることよりも、医師がそれを使って何ができるか、どれほど難しい手術ができるか。これが最も重要なこと。こうして、最高の環境で治療できることは若手医師の育成の一助にもなるし、本当に嬉しい。けれども、自分たちの技術がなければ、機械の性能を生かすことができず、結果、患者を助けることができない。だから、例え最新のダヴィンチやCVPがあるからといって、そこに満足することはありません」——。

例え、充実した医療環境に身を置いていようとも、そこに甘える者など誰一人もいない。己のさらなる成長を志す、強い意識こそが病院の信頼と病気に悩む人々を支えているといっても過言ではない。

泌尿器科を支える医師

旭川厚生病院泌尿器科。ここには、一日に80人以上、多い日では100人以上が来院する。来院者の約9割は50～80代。訴える症状はさまざまで、「尿管結石」などの排尿障害をはじめ高度な手術を要する「前立腺がん」など多岐にわたる。

当科に務めるのは5人の医師。院長を務める森 達也、主任部長の松ヶ瀬 安邦、医長の石﨑 淳司と池城 卓、そして期待の若手医員の原田 茂（敬称略）。

彼らが主軸となり、ここに訪れた年間3万人を超える患者の治療を行っている。また、尿管結石などは、急患で運ばれてくることも度々あるため、ここでは24時間常時対応する体制を整えている。こうして日々、膨大な数の患者と向き合い、奮闘しているのである。

思い描く医療の姿

取材カメラにも終始明るく柔らかな表情を見せ、互いに笑顔で会話を弾ませる5人も、現場では別人と感じさせるほど冷静沈着。実に巧みなチームワークを発揮する。

高い実績を残し、多くの患者からの信頼を守る彼らだが、日々変化を続ける医療の世界で、この先、一医療現場としてどんな姿を目指していくのか。

その問いに森 達也院長は、「多くの方々に今以上に安心して治療を受けてもらえるよう、様々な病症に対し、全ての工程を院内で全て賄えるように整えていきたい」と語る。

本誌で紹介した内視鏡下手術支援ロボット「ダヴィンチ」など、泌尿器科に関わらず、各分野で活躍する様々な医療ロボットは、分野の壁を越えての使用が許可されていない機器は未だ数多い。

だが今後、医療法に基づくガイドラインの整備が進み、規制が緩和されることで、こうした最新機器が使用できる分野が広がる可能性が十分にある。

「他分野の病気の治療にも応用して役立てることができ、より多くの方の悩みを解決することに繋がる」と医師たちも期待を寄せる。無論、それが進めば、最新医療を実践している旭川厚生病院がより発展し、思い描く、院内で患者のトータルサポートへと繋がっていくことに違いない。目指す未来をしっかり描かれている。

高度な医療技術と先端機器、志高く患者と向き合う魂が織り成し生まれる医療環境。病気で悩む方々に一筋の光を差し、快適な生活への第一歩を共に歩む場所がここにある——。

5 Doctors

Mori Tatsuya
院長　森　達也

Matsugase Yasukuni
主任部長　松ヶ瀬　安邦

Ishizaki Junji
医長　石﨑　淳司

Ikeshiro Suguru
医長　池城　卓

Harada Shigeru
医員　原田　茂

Rapport
ラポール
Asahikawa Kosei Hospital

ＪＡ北海道厚生連　旭川厚生病院　旭川厚生病院　検索

〒078－8211　北海道旭川市１条通 24 丁目 111－3　TEL/FAX.0166-33-7171（代表）

「Rapport（ラポール）」とは、フランス語で「つながり」「架け橋」、心理学用語で『信頼関係』を意味する言葉です。本誌は、旭川市のシンボル「旭橋」のように地域の皆様と当院がつながり、信頼関係を築けるような広報誌を目指します。

取材・編集 / 東洋印刷株式会社 旭川営業所